

行列のできる田舎を求めて



古宇磯祭り実行委員会

静岡県沼津市



二つの入場門で長蛇の列を作って待っていた参加者は、十時の開場とともに、一斉に小さな浜に繰り出し、場所の確保もそこそこに、潮干狩りの会場である磯に殺到する。その後、磯で捕まえたカニを使つての「カニレース大会」、特製の生け簀での釣り堀、ヨットクルーザーの乗船体験などに参加する。そして、この日のハイライトである干潮のあさ場に臨時に作られた囲いのなかに、みんなが見ている前で放流したタイ、ハマチ、アジなどを素手とタモと呼ばれる小さな網を使つての「つかみどり大会」に挑戦する。参加者は、体長が一メートル近くもあるススキを体で抱え込むようにして用意してあるアイスボックスに入れ、水しぶきをあげ、再び囲いに戻っていく。この日はあいにく曇り空の肌寒い日。なかには水着姿で果敢に挑戦していたが、冷えた体を、海の幸が詰まった水重鍋が温めてくれる。

古宇磯祭りは、沼津の海岸線の中ほどにあるおよそ六十世帯の西浦古宇地区の人たちが五月下旬の大潮の日で開催しているお祭り。参加者は、県内や首都圏などの県外から家族連れ千二百人。事前に中学生以上が二千七百元、四歳以上から小学生までが千二百円の参加費を払い込んでいる。そう有料のお祭りなのだ。

古宇地区の人たちがこの祭りを始めたのは、平成三年。過疎化と高齢化が進み、リゾート開発の話が舞い込む古宇の集落で、若者たちが、「時代に流されない地域づくり」をめざして勉強会を立ち上げる。このなかでだされたのが、「過疎化して田舎になる」という消極的な発想ではなく、不便さをわずらわしい風習も地域資源となりうるといふ発想の転換、「積極的に田



舎を作ろう」という考え。具体的に考え出されたのが古宇磯祭り。勉強会に参加したメンバーを中心に実行委員会を立ち上げ、古宇の海と磯をテーマに祭りを企画する。ここでこだわったのが有料のお祭り。もちろん、財源の厳しさもあったが、まちおこしのイベントは無料が当たり前という風潮のなかで「お金を払ってでも参加したくなる祭り」をねらった。初回はマスコミの報道も手強い、予想以上の大盛況だった。その後、一部の紆余曲折があったもののこの祭りは軌道に乗り、今年で十三回目を迎えた。

準備、裏方として古宇地区の大半の人たちが、この祭りに関わっているが、あわせて、大きな力を発揮しているのが、三島市にある日本大学を始めとする総勢五十人におよぶ大学のサークルの面々。この地に住み、大学事務局に勤務している真野さんの働きかけで、第二回からボランティアで参加している。スキューバダイビング部やローバースカウト部は、前日から泊まり込みで、海岸の清掃、テント張り、生け簀の備え付けなどなど準備万端を手伝う。当日は、早朝から一トンにもぼる潮干狩用のあさりを撒布したり、各コーナーの世話役や場内整理などをする。これに加え放送部が、場内放送、レースの実況中継、優勝者へのインタビューを、ダンス部は、オープニングで祭りのテーマソングである「カニカニROCK」を踊り、花を添える。その後、ダンス部の女子学生たちは水重鍋の盛り付けも手伝っていた。

今年はまだ一つ力強い味方が加わった。昨年十一月、古宇地区に養護老人ホーム「遊法苑」が開所した。ここに入所したお年寄りや石原理事長をはじめとする職



員は、地域に溶け込むためにも、この祭りに積極的に参加する。当日は、専用のブースを設け、みんなで作った竹とんぼ、紙飛行機、人形、菜箸や食べ物を無料で配ったり、有料で販売している。

参加費を取る厳しさ、シビアさも当然ながらある。しかし、参加者の要望や苦情を聞いてその改善策を考えることを楽しんでいるように見受けられる。つかみどり大会で、みんなが見ているままで、魚を投げ入れるようにしたのもその一つ。カニレースでは、最初、レース板を平らにしていたため、カニが動かず、レースにならなかったという。その後、カニの生態を観察、傾斜をつけることにより解決した。また、岩場で足を切ったりする人もいる。そこで、地元の岩井先生と遊法苑の看護師さんが、終日、救護所で待機し、ケアしている。

実行委員会の事務局を預かる新井修一さんは、「古宇磯祭りというイベントをやったからといって、古宇の地域が変わるわけではない。しかしこの祭りを続けていくことで人が育つ」と祭りの意義を語る。古宇磯祭りで培われた人たちが、これから地域を変えていくのだろう。

連絡先  
古宇磯祭り実行委員会  
〒410-0241  
静岡県沼津市西浦古宇16-10  
TEL 055-942-2218